

神林章夫の思想研究（抜粋）

伊虎 著

序文

訪問先の台湾師範大学から戻るとまもなく、尹虎博士の情熱あふれる手紙と原稿が届いた。彼が出版する本『神林章夫の思想に関する研究』の序文を書いて欲しいと言う。神林章夫先生は日本のチェーンストア・グループ・カスミの前社長であり、人々から尊敬されている日中友好の貢献者でもある。私は1989年4月に日本東京藝術大学に入学して声楽を学んでいたが、幸いにもその翌年に学校から推薦されて、カスミが設立した「財団法人神林留学生奨学会」から1年間奨学金を受けることができた。当時、経済的に苦しかった私にとって、この奨学金はまさに干天の慈雨であった。私は1998年3月に東京藝術大学で声楽博士号を取得してからも、引き続き東京で声楽公演活動を行っていた。その間にも、カスミの会長であった神林章夫先生から温かい思いやりと援助を受け、神林先生と深い友情を結ぶことができた。2005年9月、私は陝西師範大学の招きに応じて、陝西師範大学音楽学部の学部長・声楽教授となった。2007年11月10日、神林章夫先生が日本船橋市囲碁代表団と共に西安を訪れた際に、私は幸いにも神林先生と西安でお会いすることができた。長期にわたる神林先生との交流においては、音楽や芸術を話題にすることが多かったが、日本の経済学者（先生は日本信州大学経済学部の学部長・教授をされていた）であり企業家である神林先生の心の広さや独特な考え方を常に感じていた。

1999年の夏だったと記憶しているが、神林先生の招きにより私はカスミの本社でリサیتالを開いた。私は東京から電車で土浦市駅まで行き、それからタクシーで本社まで行った。運転手からカスミに到着したと聞いて目の前の本社の建物を見た時に、私は茫然としてしまった。というのは、あまりに芸術的で宮殿のようであったからである。オフィスビルの中にはコンサートが開ける多目的ホールがあり、舞台にはグランドピアノが置かれている。オフィスビルの小会議室には世界の有名画家の絵画や珍しい調度品が飾られている。東洋と西洋、そして古代と現代の建築要素や趣きが、ビル全体に有機的に溶け込んでいる。ゲーテやユーゴーなどの偉人が建築を「凍れる音楽」と形容するのも無理はない。あとから私は、このオフィスビルが神林先生の依頼による、アメリカの有名建築家マイケル・グレイヴスの設計であったことを知った。当時、カスミの社員から聞いた話によると、毎年会社が費用を出して、本社で週末を利用して、無料の市民講座やコンサートなどの公益活動を定期的に行っており、これがすでに地域市民の文化生活の一部となっているとのこと。こうした公益活動によって企業の支出は増えるが、市民や政府に対する会社の評判は高まり、企業に対する消費者の信頼感も深まる。同時に企業文化も豊かになり、社員の教養や社会奉仕意識も高まる。この点だけにおいても、社会公益事業に対する神林先生の奉仕精

神が十分に表れており、企業家としての独特な視点と経営思想がうかがえる。

近年、神林先生は高齢になられて会社の要職を退かれたが、「財団法人神林留学生奨学会」の理事長は引き続き務めておられる。「財団法人神林留学生奨学会」のデータを統計すると、1985年から2010年までに「財団法人神林留学生奨学会」が資金援助したアジア各国の留学生は595人となり、ここ8年間で中国人留学生の数は全体の65.8%を占めるようになった。このほか、113件の研究項目にも資金を援助している。

本書の作者である尹虎博士は日本に留学した学生の中でも特に優秀であり、現在国際日本学研究所（東京）で『日本外交史』を研究している。彼は神林先生に崇敬の念を抱いて8章にわたる執筆を企画した。本書は異なる角度から神林先生を余すことなく論じている。本の出版に際しては、神林先生を何度もお訪ねし、カスミの企業広報資料やデータなどを参照した。本書を読んでもらえば、広範な読者の皆様にも、日本の経済学者、企業家、社会慈善家である神林章夫先生を十分に理解していただくことができ、日中友好の貢献者の偉大な心と魅力的な人柄を理解していただけるものと深く信じている。

最後にこの場をお借りして、心より神林先生のご健康をお祈り申し上げます。

陝西師範大学音楽学部学部長

東京藝術大学声楽博士

田大成

2010年7月14日

まえがき

はじめに

1917年、最初のソビエト政権が誕生し、社会主義制度が確立して、人類の歴史は「現代史」に入った。教科書ではこのように歴史の時代を分けている。中華人民共和国が成立し、とりわけ改革開放政策以降、中国国民は「現代史」の中で生き、国の「現代化」が追及されるようになった。時代は絶えず変化し、世界も常に変化して、人々の認識も「時代と共に前進」してきた。今日、現代化建設に奮闘している人々にとって、この「現代化」という意味や性質をどのように理解すればよいのだろうか。筆者からすれば、これはどうしても「避けて通る」ことのできない難題な理論なのである。なぜなら、私たちの目の前で繰り広げられている客観的な世界では、社会主義の方向転換が図られ、新しい経済発展や資本成長への道を「もろに」に進んでいるからであり、資本主義も調整されて引き続き発展しているため、「市場経済」や「計画経済」がすでに社会形態を分けるための重要な要素ではなくなってしまったからである。冷戦時代に平行線で敵対していた2つの大きな社会制度が、今では交わり補い合って発展していくという状態となっている。「現代化」とは長期的で多様性に富み、複雑で総合的な特徴を持っている歴史過程である。そのため、歴史が発展するうえでの横軸と縦軸を同時に把握しなければ、発展の全貌は整理できず、現代化に内在するメカニズムと運用法則も掌握することはできない。私たちはこうした過程の中で、国際社会を理解せざるを得ず、先進国を研究し、先進国に学ばざるを得なくなったのである¹。

中国人にとって言えば、世界各国の現代化モデルの中で日本が最も研究価値の高い対象であることは疑いがない。その理由は、日本が近代アジアで唯一「近代化」を実現した国であり、しかも現在現代化が最も進んだ国のひとつであるからである。中国と日本は同じ漢字文化圏にあるため、文化や考え方に似ている点が多い。日本は近代、中国に対して大きな被害を与えた国である。この「隣人」と代々付き合っていくには、その民族性と社会メカニズムを理解していく必要がある。同時に、中国は現代化を推進していく過程で、日本とうまく協力関係を結んでいかなければならない。

「現代化」の内容にはあらゆる事柄が含まれており、大きくはマクロから、小さくはミクロまで、すべてを研究対象として視野に入れる必要がある。本書では比較的よく見られる考察の方法、つまり「人物の考え方を研究する」方法を採用した。代表的な人物を研究して分析することは、異国の文化や思想、ひいては社会を理解し掌握する最も効果的な方法のひとつである、と言えるであろう。

本書では、現代日本の有名な学者、企業家、「民間外交家」である神林章夫先生を研究対象に選び、神林先生の外国に対する認識、商業管理論、文化理念などの8大思想領域に対して、学術性の高い分析や検討を行った。筆者は本書の学術成果が、日本の各分野に対す

る研究、とりわけ流通業や小売業といった経済の発展様式に対する研究、企業文化や企業家精神に対する研究、民族気質、文化意識、価値観、道德基準の特徴に対する研究、対外関係における考え方や、原則、手段などの研究に対して、学術的な依拠、経路、方法を提供し、学術に貢献できるものになるであろうと信じている。

1. 研究の目的と意義

1-1 海外の友人である神林先生の考え方を広める

新中国の建国と発展の歴史の中で、中国の国民に多大な援助を提供し、大きな貢献をしてきた海外の友人は多く、中には大切な命まで捧げられた方もいた。新中国建国 60 周年にあたる改革開放 30 周年の 2009 年には、そうした海外の友人を中国の国民は一層懐かしむようになった。そして、国慶節に、国民の感謝の気持ちを伝えるために、中国共産党中央政治局常務委員、全国政治協商会議主席の賈慶林氏が中国共産党と国民を代表して、海外の友人代表者²を人民大会堂に招待して宴席を設けた。また、駐外国大使館でも感謝や祝賀の活動が相次いで行われた。本書の執筆はこうした環境の下で始まったのである。

昔のことわざに「人から受けた恩はたとえ小さいものであっても、倍にして返さないといけない」というものがある。受けた恩に感謝することは、中華民族の伝統的な美德である。党と国の優れた指導者のひとりである鄧穎超氏³も次のように書いている。「中国の国民を支え、中国の革命や建設に大きく貢献されてこられた海外の友人たちに敬意を表します。彼らが話題に出るたびに、親しみ深い懐かしいお名前をそれぞれ思いだし、深い友情で結ばれた情景が一つ一つ思い出されます。彼らの高尚な心や献身的な精神に深く感動させられました。私たちは彼らが中国の国民と結んだ貴重な友情を決して忘れてはなりません。」⁴ 中国共産党も中国の国民もこれまで新中国が「恩」を受けた海外の友人を忘れたことはなかった。

注意すべきこととして、鄧穎超氏は文章の中で感謝の意を表しているだけでなく、中国の知識人に次のような要求と願いを提示している。「私たちは彼らを永遠に尊敬し、敬愛し、記念して、彼らに学ぶよう後世に教育していかなければなりません。こうした海外の友人の書物や生涯の業績を詳しく調査し研究して彼らの伝記を書き、彼らの書物を翻訳して出版し、彼らに関する映像番組を制作して、彼らの崇高な人格と献身的な精神を中国の国民に広めていく必要があります。特に青年たちには、こうした伝記や書物を読むよう幅広く奨励し、祖国を愛し、国民に奉仕し、外国との友好を大切にすることを啓発して、若者の心に国際主義の明かりをともし続けていかなければなりません。」言葉を変えて言えば、鄧穎超氏が私たちに願ったことは、海外の友人に対する気持ちを感謝の念だけにとどめてしまわず、より多くの国民が海外の友人の業績や考え方を理解して、これを国民の心の財産に変えて欲しいということなのである。

1991 年、鄧穎超氏の心遣いと指導の下に、『中国国際友人研究会』が北京で設立された。

こうして、中国の国民が組織的かつ計画的に海外の友人を研究し記念する時代が始まった。過去を振り返ってみても、海外の友人に対するわが国の研究は、世界から注目される成果をあげている、と誇りを持って言える。しかし同時に、海外の友人に対する研究はまだ初歩の段階にあり、研究がかなり足りないことも認めざるを得ない。海外の友人に対する研究は、それ自体をその他の研究と比べると、外国語の資料の収集、閲読、翻訳に対する要求が高い。しかも、海外の友人をより一層詳しく分析して、理解するためには、さらに当人が所在している国を視察して調査しなければならない。海外の友人に対する研究を国内の研究機構が中心となっていけば、それ自体に克服できない限界が生じる。ならばどうすれば、より効果的かつ合理的に研究を進められるのであろうか。本書の執筆作業と編集作業は、こうした状況への一種の挑戦であり、試みであると言える。本書は日本の東京で執筆を完成させた。原文は日本語で書き、使用した関係資料もすべて日本語であった。また、神林先生に対する筆者のインタビューも直接日本語で行った。最後に、神林先生ご自身に文章をチェックしていただいた。この点が、海外の友人をテーマとしたこれまでの研究と明らかに異なる。筆者が最大限の努力を尽くして、最も完璧かつ直接的な方法で主人公の考え方を伝えようとしたことに重要な意義がある、と言えるであろう。

本書の編集では、日本の大学 7 校の合計 9 名の中国人留学生が翻訳作業と校正作業に参加した。私たち海外で学ぶ学生がこの『神林章夫の思想に関する研究』を執筆したのは、鄧穎超氏などの革命の先人の遺訓に従い、海外の友人の理念を広めて普及させるためであった。同時に、自分たち自身の行動で、建国 60 周年と改革開放 30 周年を記念し、偉大な母なる祖国を祝うためでもあった。

神林先生は中国の国民から深く敬愛されている海外の友人である。彼はこれまでに中央政府から欧米諸国の勲章に相当する「友誼賞」を授与され、さらに北京市政府による「長城友誼賞」、広東省政府による「南粵友誼賞」、広州市政府による「羊城友誼賞」などの特別榮譽賞も受賞されている。中国の国民は、神林先生の数十年にわたる一貫した中国に対する深い友情を忘れてはいなかった。本書の執筆も、海外で学ぶ学生の神林先生に対する感謝の気持ちが主な原動力となっている。

<写真>

(中央政府が神林先生に「友誼賞」を授与)

神林先生は日本のカスミグループの前社長であり、忙しい身でありながら茨城県つくば市日中友好協会の会長も兼任されている。彼は中国の人々の友人として、改革開放政策後に立ち上げられた中国の流通業や販売業に無私の援助を提供した。また、日本国内でも日本と中国の政治交流や文化交流の推進に尽力し、奨学財団法人を引き継いで中国人留学生の生活や学業を援助している。本書では、神林先生の経歴や思想を比較的詳しく分析して解明し、私たちの海外の友人である神林章夫先生を中国のより多くの国民に理解してもら

いたいと考えている。

1-2 海外で学ぶ学生が「歴史の中間物」の伝統的な責任を担う

改革開放政策後 30 年にわたり、中国の経済は高度成長が続き、国全体が大きく様変わりした。GDP は数倍になり、生活水準も大幅に向上した。工業化が中期の段階に入り、都市化の基礎が築かれた。世界に占める中国の地位も急速に向上し、経済力では世界第 4 位に入った。近代の数百年にわたる中国国民の強国の夢が実現し始めたのである。

一方、高度成長によってもたらされたマイナス面の影響も注目されるようになった。中国人はこのような高度な経済成長に対して十分な心構えができていなかったと言える。市場経済はこれまでの体制や思想観念に大きな衝撃を与え、改革開放政策の推進とともに中国社会は驚くほどの速度で成長した。同時に社会問題も生じるようになり、貧富の差、格差の拡大、資源の使い果たし、環境破壊などが中国社会の安定と成長を妨げるようになった。

とりわけ「金銭」を第一とする社会気風は、国民の安定した生活を直接脅かし、中国の国際的な名誉にも影響を及ぼすようになり、この問題に対して社会的に幅広く関心が高まり、深く考えさせられるようになった。中国の食品加工業では 2008 年に「三鹿粉ミルク事件」などの大事故が発生した。国民の利益に直接被害が生じ、同時に「道徳的な社会」の重要性が見直された。この事件は、わが国の一部の企業が、ひいては一部の大企業でさえも、まだ「金銭」を第一とする単純に企業利益を追求している段階に留まっており、「企業市民」道徳を企業評価基準とする環境がまったく形成されていないことを物語っていた。これでは、中国の企業文化と企業家精神はまだ繁栄のさなかにある、としか言えない。

1990 年代末になると、中国の知識人はもう黙って傍観していることができなくなった。そして、北京大学の銭里群教授を中心とした人文学者や社会学者たちが事態の深刻さを認識して、中国共産党と中国の国民は、思想や精神の領域で反省と再認識を行う必要がある、と主張し始めた。しかし残念なことに、市場経済の容赦ない一掃により、知識人は改革開放初期における思想啓蒙段階の中心的な位置から時代の隅へと追いやられてしまったのである。全国民が商業ブームに熱中している中で、まるで一夜のうちに、知識人が何を考えているかなど、政府の中にも国民の中にも関心を持つ者はいなくなってしまい、時代の流れに合わない知識人の厳しい声に耳を傾ける者もいなくなり、耳を傾ける時間もなくなってしまったことに、知識人たちは突然気付くのであった。

海外では、留学生たちも同じように「市場経済の法則が社会精神領域に容赦なく入り込み、中国の社会思想を世俗化し商品化している。そのうえ、より深刻な精神の危機を国民に誘発させる可能性を秘めている。」という現状を認識していた。

中国の近代史と革命史から証明されるように、外国で生活し学んではいるが、心は常に中国と繋がっているという、祖国を愛する留学生たちのほうが、中国国内に住んでいる人々より、社会問題の所在をよりはっきりと認識することができる。なぜなら、海外で学ぶ学

生たちは「異国や異文化に身を置き、当事国（祖国）と一定の距離を保っている」という客観的で有利な環境にいるからである。そこで、しばしば彼らが「歴史の中間物」の責任を担って、「絶対的な対立の中から自分と他者との関連を見だし、外部の世界の他者に対する一方的な批判から、他者と自分、内部と外部の二重や多重の批判が絡み合う方向に転じる⁵⁾」と表現される「歴史の中間物」特有の思考をめぐらせることができる。

先人たちの「歴史の中間物」という伝統を発揚することは、筆者や本書の翻訳作業に携わった留学生たちの共通の願いであった。しかし、願いは願いであっても、筆者はまだ「歴史の中間物」という思考様式を完全に把握できていないことを認めざるを得ないが、前述した「精神の危機」を解決するために本書を執筆したわけではない。日本に身を置く私たち留学生には、国内の思想領域の問題に対応できる能力も、条件もなかった。これは現実として認めざるを得ない。

しかしながら、本書には海外で学ぶ学生が国内の問題に注目し、「歴史の中間物」という使命を担いたいという願いと期待が込められている。私たちは神林先生の考え方を分析して紹介した本を通じて、私たちと同様に危機感を抱いている国内の知識人や庶民と、ある種の共感を持ち、同時に彼らを啓発したいと考えている。そして中国的な企業文化を構築し、企業家精神を培ううえで微力ながらも力になりたいと考えている。

神林先生は学者出身の成功した実業家である。そのため、彼の理念には一部の学者のような現実離れしている部分はなく、しかも一部の企業家のように実践経験を理論モデルとしてしまうこともなかった。神林先生は両者の長所を兼ね備えており、両者の欠点をそれぞれ克服していたと言える。だから彼は伝説的な珍しい人物なのであり、彼の一举一動が常にメディアの注目を浴びていた。神林先生は、経済、文化、歴史に対して、普通の人とは違った独特の見解をいくつも持っていた。なかでも、小売業、流通業、食品製造業、環境問題に関する意識は世界的に注目を浴び、わが国が学ぶに値する先進的な理論であった。本書では特に以上の内容について調査と分析を行い、さらに神林先生に代表される「企業文化」と「企業家精神」について考察している。できるだけ多くの業界関係にこの本を読んでもいただき、神林先生の考え方を役立ててくださるようお願い次第である。

2. 研究対象の神林章夫という人物

神林先生の目は、どこか超然としたところがある。どれほど知恵の光があり、どれほど計り知れない深さをたたえているのだろうか。彼はいつも静かに話をする。だが、その悠々とした声がいっまでも記憶から消えることはない。彼は笑う時に、濃く長い眉毛を少し丸めて、素直で誠実な笑顔を浮かべ、とても気持ちよさそうに笑う。

神林先生の心は自由だ。彼は「人から評価されるためや、世間に何かを証明するために生きているのではない」と言っている。彼はただ身の回りの出来事に真剣に向かい合い、自分がやる価値があると思ったことをしているだけだ。神林先生の心は中国と繋がっている。

る。彼は日中両国の人々が幸せに生活し、友好的に交流できるよう、実践を通じて多大な貢献をしてきた。

神林先生の思想は、まるで西洋の芸術と東洋の芸術を併せた混合酒のようである。このお酒が発酵した後に生じる思想は、常に捉えどころがない。しかし、それは変化に富み、実に美しく豊かであるが、そう簡単に理解できるものではない。有名作家の陳祖芬氏⁶も神林先生を「抽象的な生命体」とたとえている。なぜなら陳祖芬氏は、神林先生の話の聞いて神林先生の考え方に追いつこうと「走って」いると、いつも不思議な抽象画の世界に迷い込んだように、ぼんやりとした雰囲気の中で分かったような分からないような気になるからである、と言っている⁷。確かに、神林先生のあの独特な逆行思考と刷新意識は、理論体系によって簡単に分析や解釈できるものではない。たとえば、絵画を鑑賞するように、よくかみしめて味わってから、その意味を悟ることが必要なのである。

神林先生の人生は色彩豊かで変化に満ちている。彼は学界と商業界をまたがる人生を歩み、しかもその影響力は日本国内に留まるものではなかった。特に中国とは深い絆を結んでいた。以下に、神林先生が歩まれてきた経歴を簡単に紹介する。

2-1 学者

神林先生は1938年に韓国全羅北道群山府の菓種商の家庭に生まれた。戦後引き上げたのち、茨城県土浦市で幼少期を過ごした。幼い頃から読書が好きで、成績はずば抜けて良く、地元の人々に知られる秀才であった。神林先生が通った高校は、東京都で最も有名な桐朋学園である。1956年、日本の最高学府である東京大学に入学してさらに造詣を深めた。大学時代、勤勉で学ぶことが好きだった彼は、教育学と経済学の両方を専攻した。さらに、長年の研究を積んだ末、1967年には東京大学社会科学研究所の研究助手となり、正式に学者の道を歩み始めた。その後、神林先生は東京大学を離れて長野県の信州大学で教鞭を執り、『公共財政学』を教えた。彼の講義には独特のスタイルがあり、学生たちから親しまれて尊敬された。

この間、神林先生が発表した『明治前期・町村財政の形成と教育費徴集』や『高野“構想”と経済復興会議—1947—』⁸などの論文も学术界から高い評価を受けた。先生の学者人生は一日千里の勢いであったと言える。神林先生は1981年に信州大学人文学部の教授となり、1985年には信州大学経済学部の学部長に就任した。

神林先生は勇敢で、思い切りがよく、挑戦を恐れない性格を持っている。信州大学経済学部では、学部長に就任するとすぐに大胆な入試制度改革を行い、1科目の点数が特に高い受験生を入学させる「一芸入試制度」を実施した。彼はさらに一般社会人から大学講師を公募して、学者や研究者が大学講師を務めるというこれまでの固定観念を打ち破り、しばらくの間、学界や官界ではこの話題でもちきりだった。神林先生は自分の教育改革理念を『信州大学経済学部—組織は考える』⁹に書いて幅広い注目を浴びた。

2-2 企業家

世間で様々な意見が飛び交っていた頃、1989年に神林先生はまたもや学界や商業界を震撼させる旋風を巻き起こした。学部長を退官して商業界に挑戦するという。神林先生はカスミグループの副社長となり、まもなく社長に就任した。理論の世界から実体経済に身を投じたのである。世間は「経済学者の理論が実業界で通じるか」と興味津々となり、神林先生が当時のメディアの焦点となっていた。

神林先生は「カスミ」でも引き続き改革の旗を高く掲げて、企業の閉鎖性を打ち破り、新しい価値や考え方を提唱した。カスミグループは科学的で効果的な経営方針と、楽観的に向上させていくという企業文化の下に、創業者神林照雄のカスミー1,000店舗、8,000人以上の従業員を指導した。そして、スーパーマーケット、コンビニ、レストランを主に経営する関東地域で有名なチェーン商業グループに一躍成長した。

神林先生は調和のとれた企業文化を新たに構築する必要性を説き、社会責任を果たすよう提唱して、「自然を敬い人類を愛する」をコアとした人間性を尊重する経営を展開した。

神林先生は商業界に入っても著作活動を続けていた。『地域社会における小売業の役割』や『流通段階における取り組みについて（新しい容器包装リサイクルシステムの構築に向けて）』は神林先生が企業家の立場に立って書かれた代表的な論文¹⁰である。

2-3 「民間外交家」

神林先生の人生は、彼の考え方と同じように神秘的な色彩を帯びており、見通しにくく、予測しにくいものであった。

筆者は中日関係を研究している国内のある専門家から「神林留学生奨学会とはどのような政治組織なのか」と聞かれたことがある。私はこれを聞いてとても驚き「神林留学生奨学会は、アジア地域出身の留学生を支援するためにカスミの創業者が創立し、神林先生が引き継いだ研究支援財団であり、政治団体ではない」と答えた。

その後、この専門家と付き合いしていくうちに彼がそう聞いた訳がやっとわかった。2007年、彼は日中韓の3ヵ国が共同で開催した国際シンポジウム¹¹に参加した。そして彼は、中国側の会議司会者である中国科学院日本研究所の蔣立峰所長と、韓国側司会者の産業資源部の金泳鎬長官と、日本側司会者の「神林留学生奨学会」の神林先生を比べたところ、神林先生が明らかに「特殊」であることに気が付いた。その後、彼は金泳鎬長官が「神林留学生奨学会」の奨学生であったことを知り、会場で日本の政府職員たちが神林先生にいたく丁重に接しているのを見て、「神林留学生奨学会」を大きな政治組織だと勘違いしてしまったのである。実のところ、「神林留学生奨学会の理事長」というこの肩書きは、50歳を過ぎた神林先生がカスミグループを離れた時に残した唯一の社会的な呼び名であり、政治的な意味はまったく含まれていない。確かに、小さな民間団体の責任者が、会議の司会者という重要な身分で国際シンポジウムに参加し、重要な役割を果たしているということは、神林先生を知らない人にとって理解しがたいであろう。このように、神林先生は人々の目

に「神秘的な人物」として映っていたのである。

神林先生はカスミの社長を務めていた間に、日本の環境省の中央環境審議会委員や政府の産業構造審議会委員などの公職にも確かに就いていたことがある。しかし、彼はやはり政治家ではない。神林先生は企業家として、本国の政府と付かず離れずの「適切」な距離を保つことを試みていた。彼の周りの友人たちが選挙に参加して政治家になるよう何度勧めても、いつもやんわりと断っていた。

神林先生には日本の政治に参加するといった欲がないようであった。逆に、彼は「外交家」により近く、国際社会を舞台にしていた。有名企業の社長であり『世界自然保護基金』の評議員でもあった神林先生は、外国政府の要人、外交官、企業家たちと接する機会も多かった。彼は様々な人々と友人になって哲学や政治、さらには体制改革について語り合うのが好きであった（本書の第 1 章で、神林先生とオーストラリアのタスマニア政府の要人との談話や、スペインの外交官との談話について述べる）。神林先生はさらに外国の政府機関の顧問も務めていた。中国だけでも、天津市政府農業科学技術顧問、広州市政府人的資源社会保障局顧問などの職に就いていた。

神林先生は政府機関と接触があっただけでなく、中国の民間団体とも幅広く交流を行っていた。中国棋院と「囲碁の縁や人の縁¹²」を結んでいたことも注目になる。神林先生と中国棋院の陳祖徳院長¹³は深い友情で結ばれていた。2人は囲碁仲間でもあり、思想的に共感できる友人でもあった。神林先生は中国の友人と碁を打つたびに陳院長の話をされる。彼は筆者にも、陳院長との棋局や議論した内容についてよく話してくれた。しかも、「陳祖徳氏には歴史に対する独特の見解があり、実に感服させられる。」という褒め言葉でいつも回想を終えるのであった。このことから、神林先生が陳祖徳院長に対して深い友情を抱いていることがよくわかる。2006年、日本中国文化交流協会創立 50周年に際して、神林先生を団長とし、日本詩文書作家協会の大井錦亭会長を副団長とした日本の囲碁・書道会の代表団が北京を訪問し、中国の文化界から熱烈な歓迎を受けた。その時の訪問により、神林先生と中国棋院との友情が日本中国文化交流協会と中国棋院との友好にまで広がった。神林先生は日中両国の文化交流において「架け橋」の役割を果たされた。彼はさらに中国の作家が日本で囲碁関係の本を出版する際にも個人名義で援助をされた。

<写真>

(碁を打つ神林先生と中国棋院の陳祖徳院長)

神林先生は中国の経済界とも非常に密接な関係にあった。しかし、大部分において両者の交流は「神林先生が無私の援助を行い、中国側が恩恵を受ける」という形で行われた。1994年5月、神林先生の決断により、北京市人民政府商業委員会と5年間の『北京市商業研修視察団の受け入れに関する協定』を締結した。その後、広州市や天津市政府とも小売業や流通業の発展を支援する協定を締結した。

カスミグループは以上の3都市から500名以上の研修生を相次いで日本に招いて視察させ、中国の流通業の人材育成に貢献した。1回あたりの視察団の訪日研修期間は25日間であり、その間の視察団の日本滞在費用をカスミグループがすべて負担した。5年にわたるこうした視察団の受け入れや中国の流通業の人材育成に費やした金額は8億円にも達した(当時のレートで計算すると6,500万人民元に相当する)¹⁴。また、小売業や流通業に携わっているできるだけ多くの中国の同業者に日本の先進的な管理理念を理解してもらうために、神林先生がさらに中国の66箇所で実地講座を開いたところ、受講者は6万人以上にも上った。これだけでなく、広州の「広州宏城スーパーマーケット」でも、発展の過程で抱えていた運営や技術上の問題点を神林先生が自ら分析して解決した。さらに北京の「北京宝記スーパーマーケット」では「対面販売からセルフサービス販売へ」切り替えるために協力し、食品スーパーマーケットの「モデル」店を築き上げた。

また、「教育投資型援助」が、中国で留学を経験し、長い間教育界に携わってきた「産学一体化」に尽力する神林先生独自の中国に対する支援方法であった。「社会から受けたら、社会に還元する」精神に基づき、1984年にカスミグループは「神林留学生奨学会」を設立し、アジア各国から来ている留学生に資金を援助した。現在までに300名以上の中国人留学生在がこの奨学金を受け取っている。

3. 本書の構成

これまでに、神林先生の経歴や考え方を研究する本が国内外で出版されているが、なかでも比較的影響力があるものに、馬興国氏の著書『神林章夫の中国ノスタルジア』、陳祖芬氏の著書『あなたのために考える』、外川洋子氏編集『トップリーダーたちの経営構想力』などがある¹⁵。しかし、本書のように神林先生の考え方を日本の社会や歴史と重ねて、全体的に系統立てて研究したものは国内外でもあまり見られない。

本書では研究の重点を日本の企業文化や企業家精神の美しい姿——神林章夫の思想——に置き、中国の読者に日本の社会や文化、そして日本の流通業をより理解してもらいたいと考えた。

第1章では、神林先生の対外国観と国際観について述べており、とりわけ中国、インド、オーストラリア、スペインに対する考え方を考察している。神林先生は「民族や文化の多様性」を認識することが、外国との信頼を培い、友好関係を築く前提となると考えている。彼はさらに、相互理解を図るためには、他者との信頼関係を築き、他者の立場にたって物事を考える必要があると指摘している。

第2章では、神林先生の商業経営に対する認識について述べている。バブル経済が崩壊すると、日本の流通業や小売業を取り巻く経営環境に大きな変化が生じた。神林先生はこれまでの古い理念にとらわれずに、積極的に変革を主張し、新しい理念を追い続けて、最終的には「カスミ・スタイル」の経営戦略を確立した。

第 3 章では、神林先生の組織の生き方に対する認識について述べている。神林先生は、大学は教育と研究の場ではあるが、社会と関係を絶った「閉鎖的」な存在であってはならないと考えた。官僚化していく大学の組織をオープンな存在にすることが、信州大学での彼の重要なテーマであった。その後、企業家になった神林先生は、同じように企業の官僚化の問題に直面する。学者時代から企業家時代にかけて、彼は「閉鎖的な組織」をオープンにするために全力を注いできたのである。

第 4 章では、神林先生の「環境問題と社会関係」に対する認識について述べ、カスミグループの環境経営戦略を紹介している。21 世紀は「人権の世紀」と呼ばれており、「環境の世紀」とも呼ばれている。環境問題は「人間の生命に関わる人権問題」であると理解することもできる。神林先生は、住みよい地球環境をつくるために、社会的義務である環境問題への取り組みを企業が積極的に行うよう、社会や市民が圧力をかけていく必要がある、と考えている。

第 5 章では、神林先生の「社会貢献」に対する考え方について述べ、神林先生のフィランソロピー活動を分析し、企業の社会的責任について考察した。地域社会に満足してもらえる企業を作り、企業と地域社会の一体化を図ることが、神林先生の経営理念における重要な部分となっていた。

第 6 章では、神林先生の「食文化論」について述べ、食の安全に対する認識について考察した。神林先生は、食の安全を脅かす事故が多発すれば、市民は間違いなく不安になるであろうから、消費者に「安心」してもらうためには、完全な食品安全システム（製造、流通、販売時の品質検査や国の監督システムなど）を構築する必要がある、と強調している。彼は、食に対する「消費者の安心感」は、食品安全システムに対する信頼に基づくものである、と考えている。

第 7 章では、神林先生の働く女性に対する認識について述べ、女性が活躍できる企業空間を創出する方法を紹介している。神林先生は、生活感のある女性の感性と発想が、男性を中心に発展してきた企業文化にとって、新鮮で価値のあるものであると考えた。

第 8 章では、神林先生の「企業の求める人材の特徴」と「学校の職業教育」に対する認識について述べ、職業計画に対する日本の大学生の考え方を紹介している。神林先生は、企業が人材を求める際にはいくつかの法則があるが、その法則は変化するものであるため、大学では学生の好奇心、探求心、執着心を育てる必要がある、と考えている。

補論『神林章夫の芸術観』は、台湾の学者である鄭挺甄博士が書かれた書評である。鄭博士は東京藝術大学美術研究科を卒業されている。博士の文章には芸術家特有の文化的な蘊蓄があふれており、筆者はこれに感服させられた。補論では、神林先生の「芸術観」を考察しており、神林先生の芸術に対する愛情と探求心、そして彼特有の美意識や美に対する感性が実にうまく描かれている。

終わりに

本書を執筆するにあたり、筆者は常に「余すことなく正確に掘り下げる」を原則として、神林先生の考え方の本来の姿にできるだけ近づくよう努力した。本書では、神林先生の理論や考え方をより余すことなく描き出せるように、神林先生の思想を時代という大きな環境の中で考察し、これに関する日本の社会、歴史、文化の問題についても分析を行った。本書では各章をそれぞれ独立した学術論文として見ることができる。いずれも、神林先生の思想のある一面について述べており、その理念の特有性や多様性に対して初歩的な考察を加えた。

人物の思想を研究するうえでは、書き漏れてしまう点が多くなることはどうしても避けられない。健在している著名人について書けば、使える資料がさらに多くなるので、特に漏れが生じてしまう。人物の思想を研究する本ができあがると、ほかの作者はどのように思っているか知らないが、筆者には自分が無知であることを公の場で反省する機会となってしまう。「書き漏れてしまう点が多くなるのは避けられない」というのは、ただの言い訳に過ぎないこともあり、実のところ完全にわかっていないことも多いのである。筆者には学識に限りがあるため、研究や執筆において能力が足りない点や、間違いや疎漏な部分も少なくないであろう。この場をお借りして読者の皆様からご批判やご叱正をいただけるよう心から期待するものである。

注釈

1. 楊棟梁が編集した『日本の現代化の歩みに関する研究叢書（近現代思想史）』、世界出版社、2010年、1頁。
2. 12月8日、「中国に縁のある海外の友人トップ10」のインターネット投票活動の表彰式が北京人民大会堂で厳かに行われた。中国共産党中央政治局常務委員であり、全国政治協商会議主席の賈慶林氏が、訪中して表彰活動に参加したタイのシリントーン王女ら外国友人と会見した。
3. 鄧穎超（1904～1992年）は偉大なプロレタリア革命家、政治家、著名な社会活動家、確固たるマルクス主義者、党および国の卓越した指導者、中国の女性運動の先駆者である。70余年の革命的生涯において、夫の周恩来氏とともに自分のすべてを躊躇することなく中国革命や中国建設事業にささげた。鄧穎超はこれまでに全国婦人連合会主席、全国政治協商会議主席、中国人民対外友好協会会長などの要職を歴任した。特に、中国人民対外友好協会の会長を務めた際には、中国と各国の国民間の交流や友好を促進し、世界平和や世界を発展させるための進歩的な事業に多大な貢献をした。また、多くの海外の友人と深い友情を育んだ。
4. 鄧穎超、「中国国際友人研究会への手紙」、1991年3月1日、中国国際友人研究会、『鄧穎超氏の祝辞』、<http://www.capfs.org.cn/Memory.html>（2010年7月10日）

5. 魯迅は日本に留学した際に「歴史の中間物」の責任を担い、「歴史の中間物式」思考をめぐらせていた。銭理軍、『私の精神的自叙伝』、広州師範大学出版社、2007年、321頁。
6. 陳祖芬、1943年生まれ、上海人。上海戯劇学院卒業、現在は北京作家協会の専業作家、北京作家協会副主席、北京文学芸術界連合会副主席、全国政治協商會議委員。全国優秀報告文学賞を続けて5回受賞し、その他の文学賞も数十回受賞している。個人作品集は20種類以上出版している。
7. 陳祖芬、『あなたのために考える』、作家出版社、1998年、1～6頁。
8. 日本語の原文と出典は次の通り。①『明治前期・町村財政の形成と教育費徴収』社会科学研究 20 (1)、1968年 ②「高野“構想”と経済復興会議—1947—」Economic re-view、Shinshu University11、1977年。
9. 日本語の原文は次の通り。神林章夫、『信州大学経済学部——組織は考える』、第一法規出版、1988年。
10. 日本語の原文と出典は次の通り。①『小売業が銀行を見限る日』週刊東洋経済 (5478)、100、1998年 ②『特別論文 地域社会における小売業の役割』生活起点 (63)、26-31、2003年 ③『流通段階における取り組みについて (新しい容器包装リサイクルシステムの構築に向けて)』通産ジャーナル 28 (9)、1995年。
11. 2007年7月23日、日中韓3カ国の政界や学界の有識者が北京に集まり、『東アジア共同体の共通制度を創る』などのテーマをめぐって意見を交換した。
12. 神林先生は子供の頃から碁を打つのが好きで、どんなに忙しくとも時間を見つけては友人と碁を打っていた。国際関係史を学んだ人なら知っていることだが、冷戦時代に日中間には「囲碁外交」というものがあり、囲碁はかつて日中両国の交流を推進する「友好の使者」となっていた。その頃に囲碁が好きで、世界に目を向けることが好きだった神林先生と中国の棋士が自然と一緒に碁を打つようになり、「様々な事」を話すようになった。
13. 陳祖徳、棋士、上海人、1944年生まれ。1964年、1966年、1974年の3度にわたり全国囲碁選手権大会で優勝している。相次いで9回日本を訪問し、日本の棋士と対戦した時にも勝つことが多かった。1963年と1965年の2度にわたり日本の九段に勝ち、中国で最初に日本の九段を破った棋士となった。国家体育総局棋類運動管理センター主任、中国棋院院長、中国囲碁協会副主席、『中国囲碁年鑑』編集委員会主任を歴任した、わが国建国以来の傑出したコーチである。1999年には「新中国棋界の傑出した人物トップ10」に選ばれた。
14. 神林先生は、その計画はただの「金の鶏」にすぎないが、北京の流通業のために「金の卵」が産まれることを望んだ。そして、彼はこの「金の卵」が北京のスーパーマーケットのために「金の鶏」に育ってくれることを願っていた。
15. 馬興国、『神林章夫の中国ノスタルジア』、日本研究、JAPAN STUDIES、1998年。外川洋子編集、『トップリーダーたちの経営構想力』、学文社、2004年。陳祖芬、『あなたのために考える』、作家出版社、1998年。

あとがき

はじめに

世界の一体化に向かっている今日では、さまざまな文化が混ざり合う中で再編成が行われている。これまで中国が外国の文化を取り入れてきた主なルートには、西洋から直接取り入れたルートと、日本を通じて西洋文化を取り入れ、同時に日本の文化も取り入れてきたという 2 つのルートがある。古代には、日本が中国の文化を大量に取り入れてきた。そして、その文化が現在再び中国に影響を与えている。これは一種の文化の「反哺の孝」現象である。

先進国の中で、日本は伝統的な東アジアの文化を保ってきた国であり、また日本は北東アジア諸国の中で、西洋文化を最も多く取り入れてきた国でもある。日本は東洋文化と西洋文化の融合に成功した最もよい例であると言えよう。彼らは伝統的な文化を維持しながら、外国の優れた文化や思想を「拝借」し、自国の文化とうまく融合して一体化してきた。そして、漢文化が内在する伝統的な文化を基に、西洋の長所を取り入れて一体化した、今日の「文化構造」を築き上げた。

本書で調査したカスミグループの企業文化も、アメリカ的な管理と仏教思想が一体となった日本的な思考の集合体である。10 年前、神林先生はカスミの経験を中国の流通業に教え伝えて、中国の流通業や小売業の発展に多大な貢献をされた。

半世紀前、戴季陶は「中国人の日本に対する研究成果より、日本の中国に対する研究成果のほうが遥かに多い」と憂い嘆いていた。現在、状況は大きく変わったが、わが国の日本文化に対する調査は、経済面での研究がまだ大きく立ち遅れている。筆者は、日本の科学技術や経済を研究する場合には、同時に文化の研究にも力を入れる必要があると感じている。そうしなければ、成果を取り入れるだけで土壌を研究しない「果実主義」になってしまうという過ちを犯してしまう。「果実主義」は往々にしてその「成果」の本当の意味を把握することができないことを我々は悟らなければならない。

こうした問題意識に基づいて、本書では調査の重点を企業家である神林先生の社会観に置くこととした。神林先生の学者時代に触れている部分もあり、神林先生の管理理念についても考察しているが、この本を書いた全体的な目的は、日本の企業文化と企業家精神の美しい姿——神林章夫の思想——を紹介して、中国の読者に日本の社会や文化、そして日本の流通業をより理解してもらうことにある。

1. 中国の企業文化を啓発する神林先生の思想

神林先生の思想とは、企業の使命と社会的責任の統一を積極的に提唱し、調和のとれた企業文化環境とその雰囲気を作り上げる思想である。彼の思想は、わが国の現代の特徴に

合った企業文化を作り上げていくうえで参考になる点が多い、と筆者は考える。その主な内容を以下の4点にまとめた。

1. 調和のとれた企業文化の雰囲気を作り出し、科学的発展観（科学的かつ合理的な観点からバランスのよい発展を目指す思想）を確立させる

日本は先進的な資本主義国家であり、経済規模は世界第二位を占め、貧富の差は合理的な範囲内にあり、社会的な矛盾も特に生じていない。日本の企業は共同体の意識を強化し、社会的責任を果たすよう積極的に提唱して、企業を成長させるために、調和のとれた社会環境や文化的な雰囲気を作り出している。茨城県で2番目に大きい企業であるカスミグループは、日本のこうした企業文化が実によく表れている代表的な企業のひとつであると言える。

現在、中国の企業は、企業と従業員の関係、従業員と従業員の関係、企業と企業の関係、企業と地域社会（社会）の関係、企業と環境の関係、従業員の身体と心の関係といった「6つの調和のとれた関係」を構築していかなければならないという課題を抱えている。頻発する鉱山事故、タイトなエネルギー、環境汚染などの問題は、調和のとれた企業文化がまだ構築されていないことを物語っている。そのため、中国の企業はこれまでの理念を刷新して、「6つの調和のとれた関係」に適した発展観、協力観、環境観、生活観などの価値観を構築していく必要がある。社会的責任を合理的に区分けしたうえで、人間関係の向上を図り、良好な渉外関係を構築して、企業内や企業外で成長できる環境を確保し、企業の調和のとれた成長を促進していく必要がある。

本書の第3章第2節、第4章、第5章、第6章では、神林先生が説いている「社会的に良いイメージを作り、力をいれて企業文化を構築し、企業ならびに従業員の心身ともに健やかな調和のとれた成長を促進することに重点を置く」理念について述べている。神林先生の理念は、共同体の意識を強化して、企業を成長させるための調和のとれた文化的な雰囲気を作り出す必要があることを我々に告げている。

2. 企業のイメージ作り（CI）戦略と顧客満足（CS）戦略の関係をうまく処理し、企業のイメージを引き上げる

中国では、企業文化を構築する際にCI戦略を実施して企業自身のイメージを大きく向上させている企業は多いが、顧客満足度CSに対する重視はまだ十分ではない。しかし、日本企業においては、CS戦略がすでに幅広く運用されている。経営理念で「次のニーズを見通して、新しい価値を創造する」よう求めている企業もある。つまり、顧客の心に深く入り込んで、顧客がまだ気づいていないニーズや願望を発見し、それを具体的な商品やサービスに変えて顧客に提供し、顧客にサプライズを与えて、引き続き新しいニーズを創造していくのである。中国でも企業の市場化が進むにつれて、CS戦略が導入される方向に向かうことは必至である。本書の第2章の第2節、第4章の第3節、第5章の第2節と第3節では、神林先生のCI戦略とCS戦略に対する認識について述べている。筆者は中国の企業も日本のCS戦略をしっかりと研究し、企業ブランドや企業イメージを引き上げていく必要がある

あると考える。

3. 利益の原則とヒューマニズム精神の育成との融合を重視する

企業文化を構築するうえでは、ヒューマニズムの精神を培うことが、企業文化構築の核心的な内容となる。ヒューマニズムの精神には、人間の尊厳や価値を保護し、追及し、配慮することが含まれる。科学技術や利益や科学的な精神ばかり重視して、人間性や道徳や人間的な精神を軽視すれば、社会に対する信用を失い、企業は健全に成長できる社会環境を失うことになる。日本企業の成長プロセスでもこの点が証明されている。

中国は WTO に加盟してから、企業も政府もまったく新しいルールに対応しなければならなくなった。わが国で市場経済秩序の確立後に現れた現状の問題点を見ると、企業の過当競争、信用危機、拝金主義などの現象が特に深刻であり、これが社会的な信用を低下させている。道徳やヒューマニズムに対する意識がなく、規則や秩序を守らない企業ばかりであれば、市場経済の秩序は崩れてしまうであろう。そのため、企業は企業の経済効果の向上とヒューマニズムを尊重する弁証関係を正しく把握し、チーム意識と個性を発揮させる弁証的な統一を提唱していく必要がある。これが、企業文化を構築する際のヒューマニズムの精神を培うためのベースとなる。

本書の第 3 章第 2 節、第 4 章、第 5 章、第 6 章では、企業活動に対する神林先生の考え方について述べている。神林先生は「長期的な視点でものごとをとらえる。たとえ短期的な利益を犠牲にすることがあっても、長期的な利益を重視することで、ステークホルダーの満足を獲得していく。」と述べている。彼はさらに従業員に対して、「ビジネスを単に金儲けの手段としてはならず、自分の魂を注ぎ込んで、社会に貢献できる企業にしていかなければならない。また、自分の夢や思いを消費者と共鳴させていくよう」求めている。

4. 企業の発展と国の利益との融合を重視する

わが国の企業も独自の経営理念を持っており、国際市場に参入している製品も少なくない。しかし、製品の品質はあまり高くはなく、世界的に有名になったブランドも少なく、自社を支える企業文化もまだ形成されていない。持続可能な発展を遂げられる科学的発展観を確立するためには、経済効果と社会効果を共に重視するという日本の企業文化に対する考え方や、製品品質を重視するという日本の企業文化の経営理念を参考にして学び、内包型、科学技術型、省エネ型の、効率がよく消費が少ない発展の道を行く必要があると筆者は考える。

江沢民氏は中国共産党第 16 回全国代表大会で、「21 世紀の最初の 20 年間で、わが国が行う経済建設の主な任務は、工業化を基本的に実現して、新しい工業化の道を行くことである。」と述べた。そして、胡錦濤氏は中国共産党第 17 回全国代表大会で「新しい工業化の道を行く」主な方法は、「人間性を重んじる」ことであると述べている。胡錦濤氏はさらに「21 世紀や新しい段階では、科学的発展観を掘り下げて徹底的に実施する必要がある。科学的発展観は人間性を重んじることを中核とする。どのような活動においても、常に国民の利益を出発点および到達点とし、国民が主体であることを尊重して、国民の様々な利

益を保障し、共に豊かになる道を歩んでいく。人類の多面的な発展を促進し、発展が国民のためになり、発展を国民が支え、発展の成果を国民が共に享受する。」と述べている。これは、わが国が全体的に「小康社会」（まずまずの生活水準を意味する、鄧小平氏が打ち出した市民生活レベルの目標）の建設に入った社会主義の近代化を加速させる新しい発展段階において、党の中央が決定した重要な方針である。この偉大な歴史的使命を実現するうえで、企業家の責任が重大であることは疑うべくもなく、時代に則した発展に適応させていくためには、企業家は自己の使命感や責任感をさらに引き上げていく必要がある。

神林先生は「企業の市民活動」と「企業の人格化活動」を提唱している。彼は、企業が社会的責任を果たし、国に貢献するためには、以下の 5 点をやり遂げなければならないと考えた。第 1 点は、株主と従業員の利益を確保することである。第 2 点は、社会に向けて最もよい商品とサービスを提供することである。第 3 点は、地域社会の繁栄を促進することである。第 4 点は、法律や法規を守り、企業情報を社会に随時発信し、経営活動を公開して透明性を保証することである。第 5 点は、企業の成長と、人類の幸福、環境保護、循環型社会の構築とを一体化させることである。言い換えれば、神林先生は企業が責任感のある「企業市民」となって、大局を考慮しながら行動し、企業利益と社会効果をしっかりと結び付け、会社の成長を図るとともに、社会にも貢献し、国のために力を尽くせる企業となることを望んだ。本書の第 4 章と第 5 章では、以上の神林先生の理念について述べている。

2. 中国の企業家精神を啓発する神林先生の思想

真の全方位外交とは、共通の経済貿易ルールを守り、より多くの国内外の競争相手と熾烈な戦いを繰り広げることを意味している。こうした状況に対して、企業が世界経済の一体化が到来した時に、生き残って成長できるチャンスを得たいと思うのであれば、世界的に絶対に負けない企業家チームを作り、どんな場合にも打ち勝つ百戦百勝の企業家精神を培う必要がある。

ここ数か月、筆者は先進的な文化思想を持つ神林先生の人生経験を詳しく研究してきた。そして、その中から日本の優良企業の哲学理念と企業家精神に共通する性質を探り当てた。

本書で述べた神林先生の理念から次のような法則を簡単に導くことができる。道徳や倫理に欠ける人は、たとえ学識が豊かでどんなに才能があったとしても、その人の内面にある潜在能力を、社会に役立てる実質的な能力に変えることはできない。それだけでなく、その人は「才能」を利用して、企業や社会的価値の創造にマイナス作用を生じさせるかもしれない。一方、誠実で、信頼でき、責任感がある道徳的な資質を持った人であれば、力が弱く、その資質が並程度であっても、自分の潜在能力を十分に発揮させることができ、人的資源価値の最大化を図ることができる。

2-1 企業家精神の魂

筆者は神林先生の企業家精神の中核となっているものを「天を敬い、人を愛する」で形容できると考える。「天」とは事業であり、大衆であり、消費者であり、社会である。「人」とは従業員であり、同僚であり、経営者であり、世の中のすべての人々である。

まさに神林先生が言うように、企業家は美しい心を持っていなければならない、他人の立場に立って考えるという思いやりで充ちていなければならない。そして、謙虚さと感謝の気持ちを忘れてはならず、素朴な心を持っていなければならない。

企業家精神とは、仕事に対して使命感を持っている経営者や管理者が求める精神的な原動力である。したがって、目の前の機会や挑戦に対応していくためには、イノベーション能力のある企業家を急ピッチで育成することが、企業のコア・コンピタンスを形成するベースとなる。

2-2 企業家の道德価値

良心が企業家精神に反映されると以下の3つの役割を果たすようになる。1つ目は、企業家が活動する前に良心が「指揮」するという役割。2つ目は、企業家が活動している最中に良心が「検査」するという役割。3つ目は、企業家が活動を終えて反省や総括した時に良心が「審査」するという役割である。そのため、企業家のモラルは高尚なものでなければならない、これと同時にモラルによって企業家の人柄や魅力も形成される。

神林章夫先生の理念や実践から次の事実が証明された。富や財産と道德的なレベルとは特に必然的な関係があるわけではない。道德レベルが低い、見識が浅い、度量が狭い、社会的知識に欠ける、感情に乏しいなどは、どれも企業家のあるべき姿ではなく、たとえ才能があっても、人材とは言えない。そのような人が企業を運営すれば、人的資本の収益率はゼロかもしれず、マイナスになるかもしれない。

以上から、市場経済とは、もともと自分自身の利益の最大化を追求することを内在的な原動力としている競争経済であるが、同時に道德的な制約を伴う経済でもある、ということがわかる。

3. 企業家の国際主義精神

本書の第1章と第4章では、神林先生の国際観や中国に対する無私の援助について述べている。この章を読んでいただければ、神林先生の「天を敬い、人を愛する」精神が「世の中のすべての人々」の幸せと密接に繋がっていることがわかるであろう。

有名作家の陳祖芬氏は「神林先生に中国語は話せるかと聞くと、神林先生は『為人民服務』しか話せない、と答えた」と回想の中で語っている。長年にわたる彼の行動はこの一言で表され、そして大勢の中国人を感動させてきた。

「海外の友人」と言えば、中国人はみなベチューンを連想し、小学校の国語の教科書に

毛主席が書いた『ベチューンを記念する』が載っていたことを思い出すことであろう。毛主席は次のように書いている。「我々はベチューン同志の少しも私利私欲のない精神を学ばなければならない。この点から出発すれば、大いに人民に役だつ人となることができる。人の能力には大小の違いはあるが、この精神さえ持っていれば、それは高尚な人であり、純粋な人であり、道徳的な人であり、低級な趣味から抜け出した人であり、人民にとって有益な人である。」筆者はこの言葉が神林先生にも同様に当てはまると思っている。

ベチューン医師は亡くなられてしまったが、彼の精神と博愛心は今でも中国の国民に影響を与えている。神林先生はご高齢ではあるが、今でも若々しく、感情豊かで気概に富み、中国の経済の発展や改善に対して優れた見解を持ち、私たちを感動させている。ベチューン医師から神林先生まで、すでに70年の歳月が経っているが、その精神は今でも絶えることなく受け継がれており、思想の交流においても溝はなく、文化も引き続き傳承されている。なかでも、ベチューン先生も神林先生も、中国が「恩」を受け、中国の国民が敬愛する海外の友人であり、そして中国の明るい前途や将来を固く信じてくれた海外の友人である、ということが特に重要であると考える。(この場をお借りして、神林先生のご健康とご長寿、そして末永い幸せを心からお祈り申し上げます。)

終わりに

今日、世界では情報化によってグローバル経済や社会が大きく変わりつつある。これにより人類社会が変わり、企業の組織やメカニズムが変わるので、変革することが必然的な選択となることは必至である。中国の企業はその変革の産みの苦しみの中で、過去や現在を反省し、企業文化や企業家精神を重視するようになってきた。

では、どのようにして中国的な特色のある、社会に認められ、従業員を団結させられる企業文化や経営理念を確立していくのか。それが、中国の経済関係者にとって解決しなければならない課題となっている。また、企業家精神は人や財産以外の第四の重要な資源であるため、中国企業は企業家精神の確立を企業の資産価値の向上を促す重要な手段として、力を結集して企業の文化性を引き上げていく必要がある。

30年余りの努力の末に、中国にも世界的に有名な大企業が誕生するようになった。しかし、数十年間の努力を経て、今でも経営、与論、思想分野で活躍している中国の企業家の名を我々はまだ挙げるができない。しかし、筆者は中国にもいつか神林先生のような学者タイプの企業家が現れるであろうと信じている。そして、そうなった時に、中国企業は初めて本当に強大になったと言える。その時には、中国の企業家も対外的に自分の考えを公表できるようになっており、中国の企業家の考えが、世界の精神的財産を構成する重要な一部分となっていることであろう。筆を置くにあたり、筆者の心はこうした期待に充ち溢れている。本書がそのプロセスに対して、学術的な依拠、経路、方法を提供できれば幸いである。

後記

本書は全文日本語で執筆し、初稿は日本の東京で完成させた。使用した参考資料もほとんどが日本語であった。神林先生の 73 歳の誕生日までに本書を出版させるため、『神林学友会』の程希平氏、張帆氏、李哲峰氏、方曉氏、胡実氏、李賀氏、陳毅立氏、陳麗娜氏など 8 名の在日中国人研究者がこの本の翻訳に携わった。執筆し始めてから終えるまで、そして翻訳、校正を経て、出版社に原稿を渡すまで、そのすべての工程をたった 4 ヶ月でやり遂げた。筆者はこの作業に携わった人々とともに、この本が神林先生の有意義な誕生プレゼントとなることを願っている。

翻訳に携わった人々のほか、神林龍教授、布施知子氏、奥谷恵氏、小林清人教授、『中国地区神林学友会』の張卒会長、朱晴氏、「30 周年記念委員会」の郭元委員長、石彫刻家の鄭挺瓶博士（台湾省の責任者）に対し、本書の著作に絶大なるご協力とご支援をいただいたことをこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

筆者はこのほか、長春理工大学の任麗先生、吉林大学の姜彦春先生、梁忠庶先生、北京外国語大学日本研究所の李斌英氏、延辺大学中国語学部の催蓮美氏、東京濾器株式会社の張静燕氏、張家港市経済開発区委員会の蔡婷氏、武田有限公司の趙鉄民氏、長春一汽（富維江森）の李旻熠氏、吉林省招商局の矯光宇氏の指導や協力を幸運なことにも得ることができた。皆様のおかげで、私は研究者としてどのようにしたら納得のいく研究ができるかということを経々に学んでいった。また、本書の編集と出版においては、父の尹在洪、兄の李星、弟の許容碩など、家族からも無私の援助を受けた。この場をお借りして、心から感謝を申し上げます。

人物の思想を研究するうえでは、書き漏れてしまう点が多くなることはどうしても避けられない。健在している著名人について書く場合には、なおさらのことである。人物思想を研究する専門書を出版するにあたり、ほかの作者はどのように考えているかわからないが、筆者にとっては、皆さんとともに考えていくよい機会となり、また、自分自身の学識を向上させられるよい機会になったと思っている。筆者の学識には限りがある。そのため、研究能力や執筆能力が至らず、間違いや書き漏れた箇所があるかもしれない。この場をお借りして読者の皆様からご批判やご叱正をいただけるよう心から期待するものである。

2010 年 6 月 10 日

吉林大学南嶺キャンパス第 7 住宅にて

神林章夫

1938年、韓国全羅北道群山府で生まれ、茨城県土浦市で育った。1965年、東京大学経済学部を卒業し、東京大学社会科学研究所の助手を務める。その後、長野県信州大学で教鞭を執り、1981年に信州大学人文学部の教授となり、1985年には経済学部の学部長に就任。1989年、教授職と学部長職を退官し、商業界に入り、茨城県の2大企業であるカスミグループの副社長となる。1991年に当該グループの社長に就任し、2007年5月に退任。

中国国民の古い友人として、改革開放後に立ち上げられた中国の流通業に多大な貢献をしてきたうえ、日本国内でも日本と中国の政治交流や文化交流の推進に尽力し、兄の創立した奨学財団を引き継いで中国人留学生の学業を援助している。

中国の国民は、神林章夫先生の数十年にわたる一貫した中国に対する深い友情を忘れてはいなかった。中国政府は中華人民共和国建国50周年記念に際して神林章夫先生に「友誼賞」を授与した。神林章夫先生は、さらに北京市政府による「長城友誼賞」、広東省政府による「南粵友誼賞」、広州市政府による「羊城友誼賞」などの特別荣誉賞も受賞している。

尹虎

1980年7月、中国吉林省延吉市で生まれる。朝鮮族。中国共産党員。2003年7月、吉林大学を卒業し、10月から日本法政大学に留学する。2010年3月、博士号を取得。2006年3月から2007年10月まで、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学（UBC）、アメリカ・ニューヨーク工科大学（NYIT）で造詣を深める。現在は東京大学韓国朝鮮歴史文化研究室や国際日本学研究所（東京）で助手を務め、外交史（植民地政策）の研究を行っている。